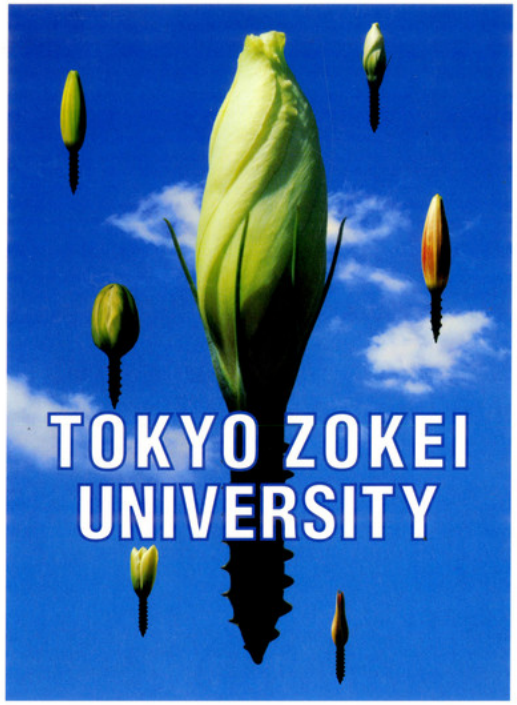
美術手帖 六八八号 二〇〇六年六月一日発行（毎月一回一日発行） 昭和二十二年四月二十日第三種郵便物認可
発行・株式会社美術出版社 〒一〇一―八四〇一 東京都千代田区神田神保町二―三十八 振替〇〇一三〇―五―一六〇 電話〇三―三二九一―七八一一（代表）
美術出版社 定価1、600円 本体1、524円
雑誌 07611-06
4910076110663
01524

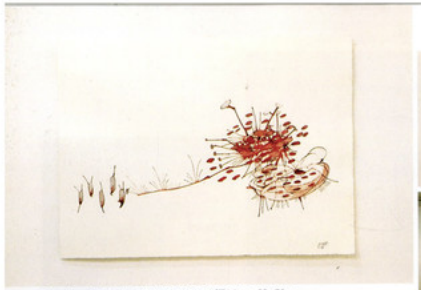


OPEN CAMPUS 7／21 Fri. 22 Sat.

東京造形大学
Tokyo Zokei University

大学院 造形研究科 造形専攻（修士課程）
造形学部 デザイン学科 グラフィックデザイン 写真 映像 アニメーション メディアデザイン 室内建築 インダストリアルデザイン テキスタイルデザイン ヤステナブルプロジェクト
美術学科 絵画 彫刻

192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556 Tel.042-637-8111 Fax.042-637-8110 URL. http://www.zokei.ac.jp/



左――Shugakuin (red) 2006 紙にインク、グアッシュ 56×76cm
右上――Ichijoji (左からorange and blue, brown and pink, semi) 2005 紙にインク、グアッシュ 各19×19cm
右下――会場風景

アン・タランティーノ「Near-maps」展

gallery neutron
4月10日―23日 京都

ストローでインクを吹き付けながら描いているというモチーフの色のにじみや、ところどころ留まりながら微細に延びた線から、はじめは植物や虫などの生きものを想像したが、"Shugakuin" "Ichijoji"という実在の地名をタイトルにしたドローイングは、作家が自宅近辺を歩いた道のりやそこで感知したさまざまな物事を記号的に示す地図であり、記録でもあった。

意味、記号、機能の脈絡が明らかになる以前の"もの"の存在は、形態そのものへと意識を向かわせる。2年前、日本語を読むことも話すこともできないまま京都に移り住んだアン・タランティーノは、目にした漢字を意味のある言語という情報でなく、図形や装飾などの単純な視覚的記号としてとらえている。手にした地図の多くは縮尺が不正確であり、イラストで示される観光名所の表記は感覚的に馴染みのないものであったという。自宅の近隣を散歩し目にした物事を形象化した作品は、未知の土地で感じたそのような情報の不正確さという経験をもとにしている。

それらは具体的な場所を示す地図といえるが、しかし画面に表されるモチーフや色彩は、目に見える存在物だけを指しているのではない。例えば着物の模様や菓子の形など、風土と歴史に培われた文化や自然といった、視覚のみならず聴覚や嗅覚なども含めて作家が感受したこの地域のさまざまなイメージが織り込まれているのである。記号的に表現されるそれらの形態は、受け手が想像の自由の限りに意味をつなぎ変えていくことができるシンボルともいえるだろう。

慎重に吹き付けたのであろうインクの線の流れが静かな緊張感を思わせて、慣れない地を歩いた時間へと想像がめぐる。京都を知る人間にとっては、自らの体験の記憶を差し挟んで既知の風物に出会う期待やそこに移り変わる季節を連想する喜びをも味わわせてくれる。色や形に時間を織り込んだこの地図は、京都を舞台にした小説のような物語を感じさせ、見る地図というより読む地図となってその世界へ誘っていくようであった。

ビル1階の
貸画廊
予約受付中

壁面長さ 59m
壁面高さ 2.8m
床面積 119㎡
床耐荷重 300㎏/㎡まで

田中八重洲画廊
〒103-0028
東京都中央区八重洲1-5-15 田中八重洲ビル1F
TEL.3273-6208 電話くだされば案内書送呈

会場風景

関西エリア kansai

酒井千穂 | 選・評

河合晋平展

GALLERYはねうさぎ
4月11日―23日 京都

得体の知れない生き物を思わせるユーモラスな形態。その支持体となっているものはすべて、日常の食用パンとしてなじみのあるバターロールである。"オルプテルアール"と名付けられたこれらは、河合晋平が芸術環境に生息し進化する生命体に見立てたひとつの生命種であった。今展で発表された"オルプテルアール"以前に、河合はこの先祖種ともいえる作品を発表している。害虫が大量に発生し、密集するかのような集合体として表現されたその時をもってこの種は絶滅したのだが、今回再び大量繁殖を成し遂げたという筋書きで作品は構成されている。商品が並ぶ路面店のディスプレイをイメージしたという展示が種の進化の過程を解説し分類する図鑑のように個々を際立たせて見せていた。

河合は、作品制作に使用するあらゆる素材やマチエールを「存在物」とよぶ。それらは自然界の「生物」と対峙するものと考えられ、「存在物」という生態系として作品に表現されるのだ。

河合が創造する「存在物」の生態系では、日光や水、気温変化などは環境破壊の要因となり、種の存続のために、またこの「存在物」も身を守らねばならない。「earth」、「animal」、「intelligence」と分類され、海や砂丘などの大地、動物や虫といった生物、あるいは文明技術をイメージさせるようなバターロールの鮮やかで装飾や模様は、自然界の生物が天敵の目を欺くためにその体の色や形を周囲の環境に似せてみせる擬態そのもののイメージを表していた。

その生態系が、展覧会という発表の場ごとに進化していくという筋道が立てられ、脈々と続く歴史にあるひとつの過程として示されている。かくまで、河合の作品は徹底的である。物を消費しなければ生きていけない現実の生活において、芸術活動もまた自然の生態系を破壊していく行為といえる。しかしながら人間とさまざまな技術的所産が相互に浸透しあう場のあり方について、進化への期待を感じさせる世界であった。

オルプテルアール（Intelligence type） 2006 バターロール、樹脂ほか 約8.5×6×6.5cm

○さかい・ちほ 1974年生まれ。美術ライター。関西を拠点に活動。